

コリント人への手紙第一14章「教会の成長のための賜物」

1A 異言よりも役に立つ賜物 1-19

1B 人に語る預言 1-5

2B 明瞭な言葉 6-12

3B 異言の解き明かし 13-17

4B 知性による教え 18-19

2A 集会における用い方 20-40

1B 信じるための賜物 20-25

2B 順番の尊重 26-33

3B 男女の秩序 34-36

4B 秩序正しさ 37-40

本文

コリント人への手紙第一 14 章を開いてください。パウロは、12 章から御霊の賜物についての教えをしています。

12 章で彼が強調していたのは、御霊の現れはいろいろあり、けれども、一つの御霊がそうされているということです。コリントの教会で起こっていた問題に、派閥がありましたが、それと同じように、御霊の現われが異なっている人々を批評し、批判し、排除していくような動きがあったのでしよう。けれども、同じ御霊がそれを行なっておられるのです。このように、御霊の一致があり、けれどもいろいろな現われがあるということが、教会がキリストのからだということで現れている、という話を彼はしました。身体の特徴は、各部分がいたわることです。独立して、自分で動くことはありません。同じように、御霊の賜物は全体の益を考えて用いられるものなのだとということです。

そこで、御霊の賜物よりも、はるかに優れた道があるとパウロは教えます。それは、愛することです。13 章では愛について教えていました。愛がなければ、どんなに御霊の賜物が現れても無に等しいということです。そして、御霊の賜物は一時期のものであり、主が再び来られて現れると、それらは廃れます。御霊の働きはキリストを証しすることです。しかし、キリストご自身が現れているのですから、御霊のその役割は終わるのです。そういった意味で、愛はいつまでも残るのであり、はるかに優れているのです。

1A 異言よりも役に立つ賜物 1-19

そこで 14 章に入ります。愛こそが求めるべき道であります。しかし、御霊の賜物を用いることも大切です。いや、これらはどちらか、ではなくて、御霊の賜物を用いる時に、愛の原則の中で行っ

ていくということです。そこで一節をご覧ください。

1B 人に語る預言 1-5

¹愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。

私たちが、熱心に求めるべきは愛です。その愛の原則の中で、御霊の賜物を求めますが、その原則に従えば、預言することを特に熱心に求めなさいと言っています。その理由を延々と話しているのが、14章と言ってよいでしょう。

愛については、追い求める。御霊の賜物については熱心に求める。「求める」という言葉がありますね。まず、私たちに、愛が足りない、欠けている。そして御霊の賜物について欠けているということを自覚することが必要ですね。愛も、その本質は神の愛であり、神の愛なしに、愛することはできません。御霊の賜物も、天から賜るのであり、自分たちに初めから与えられているものではありません。だから求めるのです。イエス様が言われました。「ルカ 11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

以前、カルバリーチャペル西東京との合同修養会で、愛についての学びをしました。¹その学びの後の感想で、何人かの方が、「愛というのが、賜物だということを初めて知りました。」と言っておられました。私たちの内に、神を愛し、人を愛する力も性質もありません。神がまず愛して、キリストを罪の供え物としてくださり、そこに愛があります。その愛に満たされて、神を心を尽くして愛します。そして、神の心と一つになっている時に、自分を通して神の愛が隣人に流れ出ます。聖霊の愛によって、愛するのです。イエス様の愛の命令を見たら、到底、自分自身ではできないことばかりです。愛が自分には全くなく、愛を追い求めることによるのみ、賜物として与えられるのです。

同じように、御霊の賜物も超自然的です。必ずしも、超自然の現象のように見えず、自然な形で現れることが多いです。けれども、超自然的なものなのです。ですから、私たちは熱心に求めます。

そこで大事なものは、何のために熱心に求めるか？ということです。自分が、霊的な恍惚状態になるためでしょうか？自分が満たされるためでしょうか？神に満たされるといいながら、実は、自己満足に陥る危うさがありますね。「主よ、私は愛しています～」と言いながら、自分がその雰囲気酔いしれる、ということがあります。または、御霊の賜物を求める、というと、何か自分の能力開発のようにみなしてしまう傾向があります。そうではなく、教会を愛する愛です。御霊の賜物は、教会の成長のために与えられているのだというのが、使徒パウロの教えです。自分の益のためではなく、他者の益のことを思い、執り成して祈る中で、主にお仕えしたいという願いから、求めていく

¹ http://www.logos-ministries.org/topic_b.html

ものです。

² 異言で語る人は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊によって奥義を語るのです。

ここから、異言について、詳しい内容が分かります。聖書の中で異言の賜物について知るならば、間違いなく、コリント第一 14 章です。

まず、異言というのは、舌は動いて語っているのですが、それを本人は理解できない言葉であるということです。使徒の働き 2 章で、五旬節が満ちた頃に、一つ心になって祈っていた弟子たちのところに、聖霊が降られました。そして、彼らが聖霊に満たされると、「御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。」とあります(2:4)。ユダヤ人の祭りなので、たまたま、世界中からエルサレムにユダヤ人たちが集まって来ていました。それで、彼らは、呆気にとられてしまいました。自分たちの住んでいる言葉を彼らを使って、「神の大きなみわざを語」っていたからです(11 節)。御霊によって、そのような神の奥義を語るということです。

もう一つ、大事な点は、「神に向かって語ります」ということです。今の使徒 2 章の箇所も、神の大きなみわざを語っていたとありますね。異言は、祈りや賛美において、自分自身が御霊によって神をほめたたえ、神に祈るのを手助けする賜物というのが、基本なのです。知性による祈りでは、どうしても言い表すことのできない、うめく祈りがありますね。そこを御霊が助けてくださるのですが、その時に、異言によって祈ることができるわけです。ロマ書で、このようにパウロが教えています。「8:26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくさるのです。」そして、賛美については、ペテロが第一の手紙で、「ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜び」と言っていますね(1:8)。

³ しかし預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します。

異言とは対照的に、預言は「人に向かって話します」。これが、パウロが異言以上に預言を熱心に求めなさいと言っている所以です。神に向かっているならば、自分の徳が高められますが、預言であれば、他者の徳が高められるからです。

そして異言と同じように、預言の賜物についても、コリント第一 14 章はとても有益です。預言の特徴について、多くの人が知りません。パウロは、「人を育てることばや勧めや慰め」と言っています。しばしば、預言というと、将来のことを予告するもののように受け止めるでしょう。けれども、ここにあるように、預言というのは、神が今ここにいる私たちに何を語りかけているのか？ということ

が重要です。

そして、もう一つ預言というと、神の裁きであるとか、恐ろしいことをするような脅しであると受け止める人々もいます。しかし、新約時代の預言は違います。イザヤが、ある意味で新約時代の到来の預言のような宣言を 40 章で行っています。「イザ 40:1-2 慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——2 エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」慰めの預言なのです。私は、数多くそのような預言のような言葉を語りかけてもらったことがあります。自分が辛いと思っている時に、自分のことをほとんど知らない人から突然メールが来て、自分の状況にぴったりと合っている言葉を書いてくれていました。お礼の返信メールを送っても、音沙汰なしです！（笑）その一方で、私のせいで、私たちの教会が 2021 年のうちに閉鎖するという預言もいただきました。（大笑）この預言は外れましたが（今は 2022 年です）、「外れた、当たっている」という前に、それが、「人を育てることばや勧めや慰め」でないことがわかります。これだけでも、その預言が偽物か本物かを吟味することができますね。

⁴ 異言で語る人は自らを成長させますが、預言する人は教会を成長させます。

異言は、個人が祈り、賛美している中で、その祈りや賛美の生活が、知性の言葉を超えたところに入っていくことができるので、自らを成長させます。それに対して預言は、教会全体の徳を高めます。「教会を成長させ」というと、何か人数が増えるように聞こえますが、そういうことではありません。キリストのからだとして成長するのですから、キリストの似姿に変えられていくことを意味します。ですから、異言は個人を成長させ、預言は教会を成長させます。

⁵ 私は、あなたがたがみな異言で語ることを願いますが、それ以上に願うのは、あなたがたが預言することです。異言で語る人がその解き明かしをして教会の成長に役立つのでないかぎり、預言する人のほうがまっています。

パウロが注意深く、今、異言について否定的に聞こえる説明をしているので、そういうことではないことを話しています。「あなたがたがみな異言で語ることを願います」と言っていますね。神に向かって祈り、賛美することはとても良いことです。御霊ご自身が与えてくださる能力ですから、もちろんそれは良いものです。今日の教会で、異言についてかなり否定的な言い方をする人々が多くいます。しかし、それは使徒たちの思いではありません。みなが異言を語ることを願うほど、それは良い賜物なのです。そして、それを熱心に求めてよいし、求めるべきです。

けれども、今、パウロがここで気にしているのは、コリントにある問題、「自分の利益を求める」ということです。すべてのことが許されていると思って、自己実現のようなものを求めていたコリント

の人たちは、同じようにして御霊の賜物を求めるようになっていたようです。それで、パウロは愛について語り、愛に基づくならば、兄弟たちを愛して、教会の成長に役立つことを第一にすることが必要なのです。

そして、「異言で語る人がその解き明かしをして」と言っています。異言の賜物の他に、異言を解き明かす賜物があります。ここも大事なのは、異言の解き明かしとは、その異言がある言語で、その言語を自分がたまたま知っていた、というものではないことです。解き明かしている本人も、その異言を知性では理解できないのです。けれども、異言を聞いている時に、思いが与えられて、それがその異言の語っていることの解き明かしです。そうやって解き明かせば、人は何を語っているかを理解でき、それで教会の成長に役立つのです。

2B 明瞭な言葉 6-12

次にパウロは、教会において、明瞭な言葉で語ることの必要性を話しています。

⁶ ですから、兄弟たち。私があなたがたのところに行って異言で語るとしても、啓示か知識か預言か教えによって語るの でなければ、あなたがたに何の益になるでしょう。

人の分かる言葉による伝達として、まず啓示があります。これは、神から何か示された、というものです。そして知識です。知識のことばという賜物がありますね。これは、超自然的に、何かについて、誰かについての知識が与えられることです。そして、預言です。預言は、その与えられた知識を語り告げることです。そして、教えです。教えは、神のみことばについての教えです。それは、すべて、理解できる言語によるものであって、それを聞いて理解できるのです。この場合、ギリシア語です。コリントの人たちが、他のローマに住んでいる人々と同じくギリシア語を話し、パウロもギリシア語を話しますから。

⁷ 笛や豎琴など、いのちのない楽器でも、変化のある音を出さなければ、何を吹いているのか、何を弾いているのか、どうして分かるでしょうか。⁸ また、ラッパがはっきりしない音を出したら、だれが戦いの準備をしましょう。⁹ 同じようにあなたがたも、舌で明瞭なことばを語らなければ、話していることをどうして分かってもらえるでしょうか。空気に向かって話していることとなります。

異言を語っていても、それを聞いている他の人々にとって、どのようなものかを知るために、例えています。音楽を奏でない限り、楽器も意味のない音です。ラッパは、戦いのために召集する時に、決まった鳴らし方がありますが、やたらと吹いても意味をなしません。空気に向かって話しているだけになってしまいます。だから、公の集まりで異言をやたらと語っていること自体が、愛のないことです。人々に、意味のないことを聞かせているだけなのですから。

¹⁰ 世界には、おそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばは一つもありません。¹¹ それで、もし私がそのことばの意味を知らなければ、私はそれを話す人にとって外国人であり、それを話す人も私には外国人となるでしょう。

異言そのものには、意味があります。人間の使っている言語の場合もあるし、御使いの言葉である時もあります。しかし、意味があってもその言語を習得していなければ、全く分かりません。ですから、外国語をずっと人に聞かせていることになります。

¹² 同じようにあなたがたも、御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会を成長させるために、それが豊かに与えられるように求めなさい。

コリントの人たちの問題は、御霊の賜物を熱心に求めていたことではありません。それはとても良いことです。パウロは注意深く、御霊の火を消すことのないようにしています。これは大事ですね、テサロニケの人たちにも、第一の手紙で「御霊を消してはいけません。(5:19)」と語っています。御霊の賜物の現れを、その火を消してはいけません。その上で、彼らに欠けていたことを話しています。「教会を成長させる」つまり、全体の益になること、他者の益になることを思って、御霊の賜物が豊かに与えられることを求めるのです。先ほど話しましたように、賜物というよりも、むしろ愛をもって、教会の人々に仕えていくことに自分自身を献げること。このことがあって、初めて、神の賜物が与えられるのです。

3B 異言の解き明かし 13-17

¹³ そういうわけで、異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。¹⁴ もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。¹⁵ それでは、どうすればよいのでしょうか。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。¹⁶ そうでないと、あなたが霊において賛美しても、初心者の席に着いている人は、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたが言っていることが分からないのですから。¹⁷ あなたが感謝するのはけっこうですが、そのことでほかの人が育てられるわけではありません。

異言で語る人が、異言の解き明かしの賜物が与えられるように祈ること、それが、12 節で言っている、御霊が豊かに与えられることの一つです。異言で祈っている時と、知性で祈っている時の違いを話しています。霊は祈っているのですが、理解できませんから、知性では実を結んでいません。それで、パウロが勧めているのは、その霊で祈っているのを解き明かしが与えられて、知性でも祈りうということです。霊で賛美しているのを、説き明かしが与えられて知性でも賛美するということです。霊で祈り、賛美することは、それはそれで自分の益になっています。けれども、公の礼拝において、それを行なっても、他の人が、特に初心者が聞いていたら分からないので、単なる音にしかすぎず、分からないで終わってしまいます。人が育てられることはないのです。

ここで大体、お分かりになってきたのではないのでしょうか？「人を育てる」という思いが必要だということ。自分の素養のため、自分の成長のために教会に来るだけでなく、次の段階、他の人々の素養のため、他の人びとの成長のために自分自身を神に献げるのです。私は牧会者ですが、ある意味、すべての人が、自分に任された中で牧会の思いを持たないといけないということです。

4B 知性による教え 18-19

¹⁸ 私は、あなたがたのそれよりも多くの異言で語っていることを、神に感謝しています。¹⁹ しかし教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、ほかの人たちにも教えるために、私の知性で五つのことばを語りしたいと思います。

パウロは、実は異言の賜物が豊かに与えられていたようです。それはそれで神に感謝なのですが、教会に対してその賜物を用いることはほとんどないようです。そうではなく、たとえわずかな言葉であっても、理解できる言葉で人々の建て上げに役立つように、知性で語りたいと言っています。

これが、私の聖書理解であります。つまり、私も異言の賜物が恵みによって与えられています。個人的に祈る時に用います。けれども、教会においてそれを語ることは、少ないです。なぜなら、知性によって語って、人々の益になるようにするためです。

2A 集会における用い方 20-40

そしてパウロは、集会において、どのように御霊の賜物を用いるべきか、さらに具体的に指示を与えています。

1B 信じるための賜物 20-25

²⁰ 兄弟たち、考え方において子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい。

パウロはすでに、コリントの人たちが、「キリストにある幼子」であることを言っていました。考え方において、今までパウロが話したように大人にならないといけません。「自分が、自分が」といわないで、全体のことを考えて、御霊の賜物を求めなさいと諭しています。

けれども、「悪事においては幼子でありなさい。」と言っています。これは、教えの風ともエペソ書で呼ばれている、偽りの教えであるとか、そういったものから好奇心を持ったり、深く探ったりしないでいなさい、ということです。私は、キリスト教の世界でどういうことが起こっているのか、いろいろ注意して見っていますが、けれども、すべてのことをみなさんにお話しすることはありません。そうしたことは、あまり知る必要がない、幼子のものであってよいのです。それよりも、良いことについて大人のようにになっていくことが大事ですね。自分の成長のことだけでなく、いかにして教会の

成長になることなのか、神から知恵が与えられること。こういったことに貪欲になります。

²¹ 律法にこう書かれています。「『わたしは、異国の舌で、異なる唇でこの民に語る。それでも彼らは、わたしの言うことを聞こうとはしない』と主は言われる。」

これは、イザヤ書 28 章 11 節からの引用です。これは、北イスラエル王国に対する神のことばです。アッシリアが攻め入って、彼らの国を倒します。そのとき、自分たちには理解できない外国語を彼らは語ります。それは、彼らが神に背を向けて、偶像を拜んでいたことに対するさばきのしるしとなります。けれども、彼らはなお、神の言葉を受け入れることはしない、と言っている箇所です。それをパウロは、異言の賜物について適用されています。次をご覧ください。

²² それで異言は、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのためのしるしであり、預言は、信じていない者たちのためではなく、信じている者たちのためのしるしです。

外国語で語られたとき、それを聞いてもイスラエルの民が聞き入れなかったように、今、教会に來ている人がそれを聞いても、悔い改めて主を信じるようにはなりません、とパウロは論じています。預言であればその言葉を理解しますから、人は悔い改めて信じるようになります。

²³ ですから、教会全体が一緒に集まって、皆が異言で語るなら、初心の人か信じていない人が入って來たとき、あなたがたは気が変になっていると言われることにならないでしょうか。²⁴しかし、皆が預言をするなら、信じていない人や初心の人が入って來たとき、その人は皆に誤りを指摘され、皆に問いただされ、²⁵ 心の秘密があらわにされます。こうして、「神が確かにあなたがたの中におられる」と言い、ひれ伏して神を拜むでしょう。

異言が語られているところに、信じていない人や初心者が來ても、気が狂っているとか思わないでしょう。しかし、預言であれば、そこに神がおられることを知り、心にあることを示されて、悔い改めて、神を拜むようになるかもしれません。

牧者チャックが、興味深いことを証していました。預言ではないのですが、異言の賜物とその解き明かしによって、人が悔い改めに導かれた話です。教会の中に、フランス語で異言を語る女性がいました。五旬節をお祝いする礼拝にて、チャックは彼女に、異言で主を礼拝してもらうように促しました。そして、その異言を、チャックの奥さん、ケイさんが解き明かしを始めました。それは、神に愛を表す美しい歌でした。

ちょうど、その時に、たまたま、他の町に住んでいる若い女性が連れて來られていました。何か問題があって、カウンセリングが必要でした。そして礼拝が終わった後に、座ってカウンセリングを

しようとしたところ、彼女はまず尋ねてきたのです。「その前に、お話ししたいことがあります。フランス語でみなさんにお話ししていた方と、通訳していた方がいましたよね？」私は、「フランス語を話していた人も、通訳していた人も、どちらもフランス語を知らないの信じられますか？」彼女が、「信じられません」と答えたのですが、「でも本当なんです。どちらもフランス語を知りません。」と教えました。それで、ここ第一コリント 14 章を開いて、説明したそうです。この若い女性は、「私はパリに五年間住んでいました。この方は、最も美しいフランス語を話していました。庶民の話すフランス語ではなく、貴族階級のフランス語の発音なんです。そして、通訳も完璧でした。」チャックは答えました。「通訳者がフランス語を知らないのは私がよく知っています。私の妻ですから。」そうすると、彼女は、「カウンセリングとかそういうことの前には、私は主を受け入れたいです。」と言ったのです。これは、預言ではありませんが、異言の解き明かしがあり、それで神への愛の歌を聞き、ここに主がおられることを知り、それで悔い改めに導かれました。

2B 順番の尊重 26-33

²⁶ それでは、兄弟たち、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まる時には、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かししたりすることができます。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい。

コリントの教会は、これらの賜物に恵まれていたようです。賛美し、教え、啓示も与えられ、異言や解き明かしがあります。けれども、彼らはこれらを無秩序に語っていた、歌っていたようです。パウロは、「成長に役立てるためにしなさい」と言っています。

²⁷ だれかが異言で語るのであれば、二人か、多くても三人で順番に行い、一人が解き明かしをしなさい。²⁸ 解き明かす者がいなければ、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語りなさい。

異言を一斉に何人も語っては、意味がありません。解き明かしができるようにします。なので、二人か、三人が順番に行います。それから、解き明かしをします。もし、だれも解き明かす者がいなければ、教会では語りません。自分独りで、神に対して語ります。

²⁹ 預言する者たちも、二人か三人が語り、ほかの者たちはそれを吟味しなさい。

預言も同じですね、二人か三人が語ります。そして大事なものは、吟味です。テサロニケ人への手紙第一でも、パウロは預言の吟味を教えています。「5:20-21 預言を軽んじてはいけません。ただし、すべてを吟味し、良いものはしっかりと保ちなさい。」預言が、果たしてキリストの福音にかなったものなのか、自分の利得のために利用しているだけのものかどうか、神の律法や他の預言に沿っているものか、そうったことを吟味します。その上で、「良いものはしっかりと保ちなさい。」とあり

ます。これは、キリスト者がいろいろ言葉で励ます時にも同じことが言えますね。いろいろな言葉の中で、必ずしも益にならない言葉があります。そうしたものは取り除いて、良いものはしっかりと保つのです。

³⁰ 席に着いている別の人に啓示が与えられたら、先に語っていた人は黙りなさい。

啓示についても、同時にそれを語って、人々が聞こえなくなるようなことがないように、配慮しなさいということです。

私たち夫婦が、二年前に、カルバリーチャペルの宣教会議に行った時に、預言や知識、啓示をする奉仕にあずかっている何人かの兄弟姉妹がいました。彼らが、宣教師たちのために、その励ましのために、ある部屋で、確か時間割があったと思います、順番に参加者に来てもらいます。私たちは夫婦で行きました。何組かの奉仕者がいましたが、男女の二人一組で、私たちのために祈られました。男性がまず示されて、何か幻を見ました。その後で女性も幻が示されましたが、同じような幻です。こうやって、それが神からのものかどうか吟味していました。そして内容は、詳しくは話しませんが、私たちの宣教の働きが次の段階に入ろうとしていることを話してくださいました。過去のものはあるのですが、先を見て、光の中に入っていきような内容です。それは、とても穏やかで、脅すものとは全く正反対で、励ましと慰めを与えるものです。お分かりのように、とても秩序だっていて、順番を作り、また二人で祈っているの、吟味もできます。そして、それは励まし、慰め、人を育て上げる内容でした。

³¹ だれでも学び、だれでも励ましが受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができるのです。³² 預言する者たちの霊は預言する者たちに従います。

一人一人の預言の賜物が用いられるように、そしてすべての人が学び、励ましが受けられるようにしなさいということです。一部の人たちだけのものではなく、教会すべてのためのものです。

そして、預言の霊は、預言する者たちに従うとは、どういうことか？と言いますと、「預言が与えられて、制御できません」となって、いきなり預言を初めて、また止めることができないというのは、言い訳にしか過ぎないということです。預言を始めるのも、終えるのも、その預言をする人の意志でいくらでも制御できるということです。異言もそうですね、異言を語る時の舌の動きは、御霊に任せられるのですが、語るのを始めるのも終えるのも意志によって可能です。

^{33a} 神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。

午前礼拝を、この箇所から話しました。混乱しているのは、自分だけのことを考えて、幼子のように

にわがままになっているからです。しかし主は混乱の神ではなく秩序の神です。この方に服する時に、秩序を重んじます。そして、秩序があるところに平和があります。神がおられると、平和が満ちます。平和という実を楽しむことによって、神のご臨在を知ります。反対にいうと、自分の肉の性質は、神に敵対します。こうなさいと命じられても、自分の気持ちや欲求を優先して、やりたいことをやっています。そうすると、必ず混乱が起こり、そこには神はおられません。

3B 男女の秩序 34-36

^{33b} 聖徒たちのすべての教会で行われているように、³⁴ 女の人には教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。³⁵ もし何かを知りたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女の人にとって恥ずかしいことなのです。

11章で、女の人たちが被り物をしていないことを、パウロは他の諸教会にはない習慣であることを指摘していました。ここでも同じで、「聖徒たちのすべての教会で行われている」ことを話しています。どんなに自分が正しいと思っても、他のすべての教会で、女が黙っているという秩序が保たれていました。今、預言をする人が他にいたら、自分は黙っていなさいという秩序の話をしていたので、御霊の賜物ではないですが、女が黙っていないという問題を指摘しています。

これは、文脈と背景をしっかりと読み取る必要があります。11章には、「女はだれでも祈りや預言をするとき(5節)」とあり、女が一切、話してはいけない、黙っていなければいけないという意味では全然ありません。女の人にも預言の賜物が与えられ、語ったり、また祈ったりしていたのです。この箇所を理解する鍵は、「もし何かを知りたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。」というところからです。つまり、彼女が話していたのは、預言を行なうためというよりも、預言や教えを聞いて、そのことについて、他の人たちが御霊の賜物を用いて語っているのに、それでも自分で勝手に語り続けていた、という背景があるようです。

ある注解によると、当時のキリスト教会の礼拝は、ユダヤ教の会堂における礼拝形式を一部、踏襲していたようです。ヤコブ書を見れば、ユダヤ教の会堂自体で礼拝を守っていた様子も垣間見えます(2章)。家の教会もありましたし、また、まだ追い出される前は、ユダヤ教会堂も使っていました。そこでは、男女が別れて座ります。ですから、女性が教えや預言を聞いて、そのことについて夫に尋ねようとして、遠くにいる夫に、「あなた、これ、どんな意味なの？」と尋ねたりしていたのではないかとのことです。

³⁶ 神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。

礼拝は、みなが進んで、みなが進ましを受けるところです。自分だけに、神の言葉が与えられた

のでしょうか？そうではないですね。教会におけるみことばを、私物化してはいけないということです。自分のことは、自分の家でしましょうということです。みなと共に同じ御霊を飲んで、御霊の食物を食べているのですから、秩序を重んじる必要があります。

4B 秩序正しさ 37-40

³⁷ だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら、その人は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。³⁸ それを無視する人がいるなら、その人は無視されま

す。

パウロが自分の思いでこれを語っているのだとすることを、パウロは禁じています。使徒に与えられた権威から出てきたものであり、すべての他の聖徒たちも守っていることであり、コリントの人たちだけに話していることではなかったのです。なので、これを無視したところで、他の人びとから無視されるだけだということです。コリントのような礼拝における混乱は、神のみこころではないということです。

³⁹ ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを禁じてはいけません。⁴⁰ ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい。

これが結論です。預言することを熱心に求めることです。人々の成長になることを求めることです。異言もすばらしい賜物です。禁じてはいけません。しかし、適切に、秩序正しく行います。教会は、両極端に陥ります。御霊の賜物について、特に異言については、それを禁じる教会が今日もあります。そんなものは今日、ないのだと断言するところもあります。しかし、ここではっきりと禁じてはいけない、とパウロは命じているのです。けれども、御霊の賜物を求める人々の間では、混乱や無秩序が起っています。その集会に行っても、何か気違いではないか？と思わされるような混乱があります。御霊の賜物は、そのどちらでもないのです。用いるために熱心に求めるのですが、同時に、用いるときは、適切に秩序正しく行うのです。

そして、私たちには、預言や異言でなくとも、いろいろな賜物が与えられています。そもそも、求めるべきは愛であり、教会の成長のことを願っておられるのでしょうか？他の兄弟姉妹が育てられることを願っているのでしょうか？自分の成長のことだけを考えていないのでしょうか？愛によって成長しましょう。自分だけではなく、他の兄弟また姉妹の益になるために、御霊の賜物をしっかりと求めてください。